



## 『82年生まれ、キム・ジヨン』(チョ・ナムジュ)

吉田 梨紗

本書は、キム・ジヨンが男尊女卑の強く残る韓国社会で心を病んでしまった原因を彼女の人生を振り返りながら探ります。読み進めていくと、韓国社会の女性差別が浮き彫りになり、女性にとって生きづらい環境なのだと知りました。母親が三人目の子供も女の子だと分かった時、墮児したことはそれを象徴している悲しい出来事です。

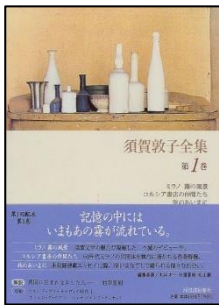
男性優位が当たり前の社会だと思っていましたが、どこか不公平さを感じていて、それが彼女や周りの人達の身近なエピソードにより、リアルに描かれています。女性なら一度は同じような経験をしたことがあり、共感できる内容だと思います。

(筑摩書房)



## 『ミラノ霧の風景』(『須賀敦子全集 第1巻』)

原 真由美



著者は若き日にイタリアへ渡り、帰国後20年の時を経て作家としてデビューしました。この本はかつて過ごしたミラノでの日々を丁寧に掬い集めたエッセイですが、単なる紀行文とは異なります。人々との出会いと別れ、風景や空気までも鮮やかに蘇り、静謐で無駄のない文章が読者を酔わせます。不思議なことにどの章にも少しもの悲しさを感じるのは、起伏に富んだ人生を経験した人だからでしょう。恵まれた境遇に甘んじることなく自らの人生と真摯に向き合い歩み続けた人です。作家生活は短く遺された作品も多くはありません。その中でも背筋を伸ばして読みたい新年の幕開けにふさわしい一冊としておすすめします。

(筑摩書房)

## 『自分の薬をつくる』(坂口恭平)

大久保美玲

個人の携帯番号を公開し「いのちの電話」として様々な悩みを抱える人々の相談に応じ、自らも躁うつ病であることを公表している著者。沢山の相談を受けて分かったのは、悩みの多くは、他の人も同じように悩んでいるものであるということ。つまり「すべての人が同じ悩みなら、もうそれは悩みではなく、人間たる者みんなそんな状態にあるということ」(p.201)で、そうなのであれば各々自分が生きやすいように環境を整え、自らに日課(著者はそれを薬と呼ぶ)を処方して心安らかに生きていくことが問題解決に繋がると著者は述べています。私も早速自分に合った薬を処方したくなりました。生きる意欲が湧いてくる一冊です。



(晶文社)